



私の好きな本

私が好きで何度も読んだ本の中に、ローラ・インガルス・ワイルダーさんの本がある。彼女は、1867年の開拓時代のアメリカに生まれ、少女時代を家族で新しい土地を求めての、旅をしながらの生活を送る。

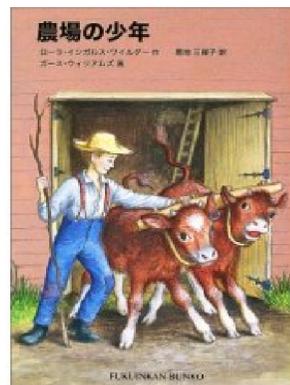
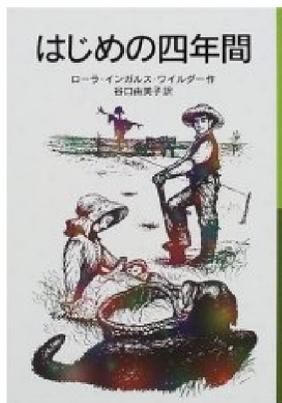
彼女が書いた本は、その時の経験を自伝にした本で、『大きな森の小さな家』『大草原の小さな家』『プラム・クリークの土手で』『シルバー・レイクの岸辺で』『長い冬』『大草原の小さな町』『この楽しき日々』『はじめの四年間』とシリーズになっている。外伝で、彼女の夫アルマンゾの少年時代を描いた『農場の少年』も出ている。

開拓者としてこの時代のアメリカを生きたローラ一家や人々の生活は楽ではない。一生懸命耕した畑は、イナゴの大群に襲われ、冬は吹雪が続き物資が届かず食糧不足になる。でも、ローラ一家の心は、活気にあふれていて明るく、まったく暗くない。物を本当に大切にし、その時を生きるために畑を耕し生き物を狩る。

ローラ一家だけではなく、この時代のアメリカ人の多くは、このような生活を送っていたのだと思う。あのアメリカにも、こんな生き方をしていた時代があったのかと思い、開拓時代の活気あふれるアメリカの空気を、味わってみたかったなぁと思った。

小金沢 基(高1)

- * 上記の「インガルス一家の物語」は、福音館文庫、講談社文庫、講談社青い鳥文庫、角川文庫、岩波少年文庫等で読むことができます。



~Music

ギターっていいわ。

初めて人前でギター演奏したのが 2007年度の入学式。エレキで入場曲「スタンド・バイ・ミー」退場曲「カントリー・ロード」だった。音楽祭のクラス合唱ではアコギ（アコースティック・ギター）で「全力少年」をバンド演奏した。

そもそもオレが初めて手にしたギターは中1の頃、エレキでもアコギでもなくクラシックギター（ガットギター）だった。最初は何も押さえないで「ジャーン」って弾くのさえ出来なかった。（笑）でも知り合いの大学生に教えてもらってちょっとずつ上達していった。でも中2の最初ぐらいまでサボっていて何も弾けなくなった。その時点でもうギタ

ーをやめようかな～とか思ったりもした。その時、「U2」というバンドのアルバム「How to Dismantle an Atomic Bomb」（原子爆弾解体新書）を聴いて衝撃を受けた。そこでエレキ・ギターってカッコー!!って思った。その何ヶ月か後にエレキを買った。最初は全然弾けなかったけど、練習していくうちにだんだん弾けるようになった。それが楽しくてうれしくてしょうがなかった。



ギターをやってる人なら分かるかもしれないけど、弾いているとあっという間に時間が過ぎてく。そして何より楽しい。弾いても弾いても弾きたりない...。「もっと弾きたい」という欲にめっちゃかきたてられる。

オレは、みんなにギターを好きになってほしい。もちろん全員っていうのはムリだけど、ちょっとでも多くの人にギターに興味をもってもらいたい。教室で弾いている時は周りにメイワクだなーとか思いつつやってる^^。うるさいもんね。（汗）でも弾いてる時はすごく気持ちいいんだよね（自分は）。ちょっとでもこの気持ち分かってほしい。



ギターをやってない人でも自分の好きな事に熱中してる時の気持ちはどう？楽しいでしょ？それと同じだと思うよ。

ギターで弾く時の自分の好きな曲をあげてみる。

SUM41の「O ver My Head」(始めのメロディ聴いて一発で好きになった) 「The Hell Song」(このアーティストで一番最初に練習した曲) 「Still Waiting」(ソロが好きなのは「Machine Gun」も) 、Bullet For My Valentineの「10 Years Today」(理由は特にないけど好き) 、Avenged Sevenfoldの「Unholy Confessions」(単純にかっこいい) etc・・・。



これを書いてたら洋楽ばかりだなって思った。(笑)「なんでだろう？」って考えてみたらケッコー色々でてきた。

1. 単純にギターの事が好きだから、ギターのパートばかり聴いてる。洋楽はギターがカッコイイのが多い。(偏見かもしれないけど)
2. 英語の歌詞を日本語にするとおもしろい。「こんな事言ってるんだ」とか、何気に英語の勉強になる。
3. 歌詞をパッと聴いたり見たりしてもすぐに意味がわからない所がイイ。
4. 邦楽にはない勢いとかオーラがある気がする。・・・以上。

佐々木 優太 (中 3)



ギターをはじめようと思っている人むけの本。

「DVD付 これから始める ロックギター入門」
(DOREMI)

すごい初歩的な事が書いてあるから初めての人にいいと思う。多少何曲かのってるよ。

みてかける



時間。時間なんてものが実際にあるってことを考える。朝、設定された時間に目覚まし時計がなると、あぁ…もう7時だ…起きないと…って思うし、昼、お腹がへってきて、おっ！もう12時40分だ、食堂に行こう、とか思い、夜、あ…今夜もこんな時間になってしまった…、と時計を見て思う。こんな感じの、決まった時間は、

だれにでもあるんだろうな、と思います。みんなは、これとは違う時間を、身近に感じる事はありますか？

スケボー。

自森にいる人なら、見かける機会が多いかもしれない。晴れた日の放課後やまれに授業中など。パッと見たただけだと、ただひたすらワイワイがちゃがちゃしているだけのように見えるかもしれない。だけど、スケボーには日常とは少し違う時間があります。言葉にするなら、たぶん、一瞬とか瞬間って名前の時間。一秒にも満たないような時間の中で、脳みそから爪先までを使い、前

の一瞬より、より高く、より速く、より綺麗に、より楽しく、それぞれの目指す理想の時間のために、一つ一つの動きを意識して。長い長い時間をかけて。

授業に出ている時間や、何かを食べている時間、起きている時間と眠っている時間、集中した時間もあれば、だらだらとした時間もあります。みんな今まで長い時間を生きてきたから、経験したことのない時間はないと思います。そんな中で、一瞬のために時間を翔けて、賭けて、駆けて、駈けて、かけたくなる人達がいて、時間をかけてでも楽しんでいたくなる何か、スケボーの中にはあります。



いろいろ知るの、楽しい。

~ ART ~

去年の秋から冬にかけて、知らなかったもの、本などであらかじめ知っていたものを実際に目にしたり耳にしたりすることが、わりと多かった。意識的につくった時間ではなくて、たまたまみんなそういうものが自分の前に現れていった感じ。この期間で出会ったものは、千利休の作った茶杓「泪」(大徳川展)、ムンクの絵(ムンク展)と、忌野清志郎(John Lennon Super Live)などなど。この他にもいろいろと考えさせられるような出来事が次々に偶然的にやってきて、まあわりと充実感のあるというか、勢いのあることというか、流れに身を任せているだけでいろいろなもの勝手につながりだして、そうしたことにびっくりしたり興奮したりすることがたくさんあった。それぞれいろいろと書き出すときりがないこと、依頼されたことは「ムンク」のことなので、そのことにしぼって書くことにする。

ムンクの絵というと、ほとんどの人が「叫び」を言う。私自身も「叫び」の絵はずいぶん前から見知っていたけれど、この間の「ムンク展」に行ってみたら、ずいぶん違う世界がそこにはあった。

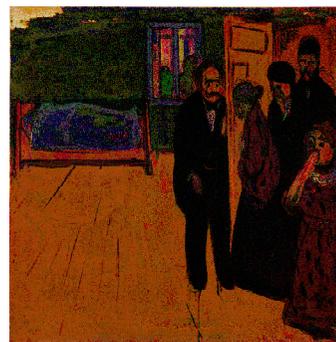
ムンクっていう人の絵は、もともととても気持ち悪い印象だった。



叫び

並んでいる絵のタイトルは、たとえば「不安」とか「絶望」とか。

「死臭」なんてのもあった。死臭だよ、死臭。そんなタイトルの絵って。絵を見てみると、遠くの方に、きっと死臭を放っている遺体が寝ているベットがあって、ドアを開けて近親者が別離のために部屋を訪問しているのだけれど、ちょっと小太りのおばちゃん(実は娘らしい)が、「死」を目の前にして鼻をつまんでいたりしている。



死臭

「叫び」「不安」「絶望」は、シリーズもので、それぞれの絵に出てくる人たちはみんな目が飛んじったりしてすごい表情をしているのだけれど、やっぱりどことなくユーモラス。空がでろでろだったり海もぐちゃぐちゃなだけれど、絵をみていて「なるほどね」って勝手に納得をつくったりできるのが、私にとってのムンクの絵。

絵っていうのは不思議なもので、その瞬間をあるがままに切り取ったものではないのが写真と違うところ。描いた人の意図的なイメージがある。それを見る側が勝手に解釈してきつこうなんだろうなあって、そこに横たわっている「物語」を想像する楽しみがある。ムンクの絵は、「物語」を想像しやすい。ここで、描き手の意図と私の想像がっているかどうかは、ちっとも問題じゃなくて、見ていてそういう時間を過ごせるのが、楽しいっていうこと。

中野 裕 (数学科)

どうして『ヴォイス』を創刊するのか

このごろ、自由の森学園が、たくさんの「観客」と、一部の「舞台に立つ人」に二分されている気がします。これはあまり、いいことではないと思います。いろいろな人の声が出ないで、自由の森学園全体がだんだんと同じ色に染まっていってしまっ、「多様性」や、「個性」といったものが見えなくなってしまいます。

そこで、批評紙・意見紙として『ヴォイス』を作ることにしました。

まず、ある物事をとらえるとき、生徒の視点を大切にします。大人の理屈や視点も、もちろんあるかと思いますが、まずは自分達自身のベースに戻って考えていこう、というわけです。どんなに立派な事を書こうと、まだ半人前、できないこともあります。でももしかしたら、まったく新しい視点が、ポッと生まれてくるかも知れません。そういったことを意識していけたらいいな、と思います。

それともう一つ、自由の森学園はあとの人たちに受け継ぐことがあまり上手ではない、と私たちは感じています。1回1回、いいものが出来ても、そこで終わってしまう、途切れてしまっています。しっかりと積み重ねて、つなげることで見えてくるものがあるはずなのに、それではもったいない。

『ヴォイス』とは言葉どおり、声のことです。鋭い指摘を取り上げ、小さなつぶやきも拾い上げ、その「器」として、声の発信源となっていきたいなあ、と思います。

編集 一同

Special thanks to all the Guests



Cham Cat

ヴォイス編集部

〒357-8550 埼玉県飯能市小岩井 613 自由の森学園図書館 出版相談室（大江）

Fax 042-972-6661 e-mail jb0@jyunomoriac.jp

編集；佐々木優太・中島大地（中3）小金沢 基（高1）神座 想・深沢 周（高2）

（表紙；佐々木優太）